

北朝鮮のグローバル展開

東京大学先端科学技術研究センター

2024年3月8日

インドネシア と北朝鮮の関係

本名純

立命館大学国際関係学部



スカルノと北朝鮮

- 両国の国交が結ばれたのが**1961年**。国際的に孤立しつつあるスカルノ大統領は**1964年**に平壤を訪問して金日成との友好をアピール。翌年1月、スカルノはインドネシアの国連脱退を宣言し、「第二の国連」を目指すとして「新興勢力会議」(CONEFO)を立ち上げた。北朝鮮はベトナムや中国と並んでCONEFOに参加することを決め、同年、金日成はインドネシアを訪問。ジャカルタ近郊のボゴール植物園でみた花に興味を持った金日成に対して、スカルノは、その花を「金日成花」と名付け、両国の友好のシンボルにすることを決めた。
- スカルノにとって、国際的に孤立を深めるなかで、自分に会いに来てくれた金日成への思いは特別。しかし同年、スカルノは失脚、国内の実権は陸軍将校のスハルトに移っていく。そのスハルトは、**1966年**に大統領代行となり、これまでのスカルノの外交路線を**180度転換**し、反共・親米路線を掲げ、CONEFOも会議が実現する前に解散。
- 30年間**、スハルト独裁体制が続き、北朝鮮との関係も国交はあるものの、冷え込んでいく。金日成からすれば、「親友スカルノ」を追い落としたスハルトとの友好など考えにくかった。スハルト政権にとっても開発独裁体制の構築と発展に、日米の強力は不可欠であっても北朝鮮に対する優先度はかなり低かった。

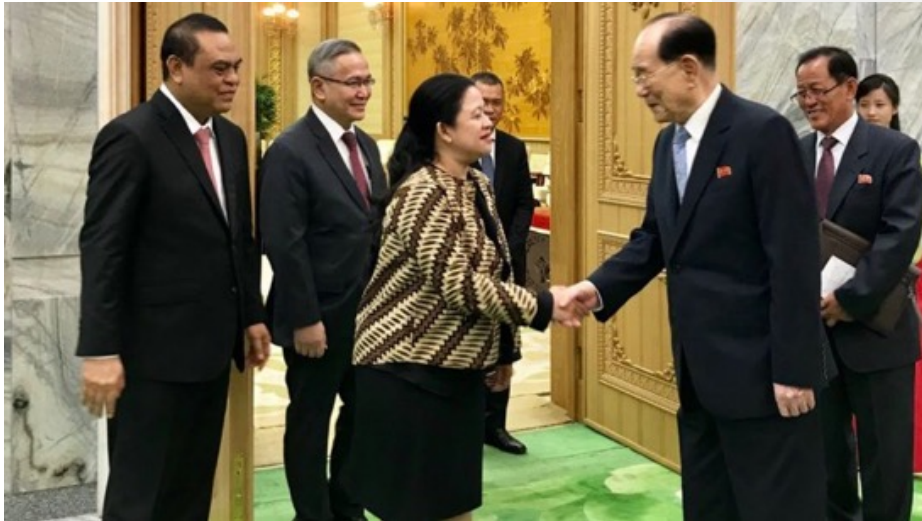


メガワティと北朝鮮

- 両国関係が再び活性化し始めるのが2001年以降。スハルト体制の崩壊（1998年）、民主化が進み、メガワティ闘争民主党党首が大統領になった年。北朝鮮のほうも金日成から金正日の世代になって、両国とも第二世代の時代に突入していた。メガワティ大統領は、2002年3月に平壤を訪問、金正日と会って親の時代からの友好関係を再確認。
- 当時の国際情勢は北朝鮮に厳しく、ちょうど米国のブッシュ大統領が「悪の枢軸」発言をして、北朝鮮への圧力を強めた時。そのタイミングでのメガワティの訪朝。1964年にスカルノが国際的に孤立したときに金日成が訪伊してくれたことを記憶する外交官たちにとっては、メガワティの2002年訪朝は、「お返し」のように受け止められた。
- ただ、スカルノの血を引くメガワティの政権期間中に、金正日の訪伊はなし。メガワティ政権が短命すぎたから。2004年の大統領選挙でユドヨノ退役中將に敗北したメガワティは、政権からは降りるものの、野党第一党のリーダーとして政治の舞台には残った。
- ユドヨノ政権下（2004年～2014年）では、さすがに金正日もインドネシアに来なかった。とはいえ、金永南（最高人民会議常任委員会委員長）がインドネシアとの窓口。2005年にバンドンで開催されたアジア・アフリカ首脳会議（バンドン会議）50周年記念式典には、金永南が参加。また第2次ユドヨノ政権下の2012年にも金永南はジャカルタを訪れ、ユドヨノ大統領と会合。



ジョコウィ時代(2014-)の インドネシア・北朝鮮



- ユドヨノ時代には、両国関係に大きな進展は見られなかったが、現在のウィドド政権になってから、インドネシアの北朝鮮外交は再活性化。大統領自身には北朝鮮へのコミットメントはほぼないが、上述のように、この政権の屋台骨は闘争民主党であり、実質的な最高権力者はメガワティ党首。政権発足後、すぐにメガワティの妹（つまり同じくスカルノの娘）であるラフマワティが訪朝。彼女は「スカルノ教育財団」の会長であり、訪朝は金正恩に「スカルノの星賞」を授与するため。ラフマワティは、彼が朝鮮半島の平和に大きく貢献してきたと絶賛。
- メガワティの娘プアン（闘争民主党政治家）も北朝鮮外交で役割を果たすようになる。つまりスカルノ家の「第3世代」で、相手も金正恩という第3世代。プアンは、ジョコウィ第一次政権で調整大臣（人材開発・文化問題担当）、その大臣時代に大統領特使として2018年7月に平壤訪問。金永南と会談し、翌月のアジア競技大会（アジア大会）に金正恩を招待。

- この外交タイミングも興味深い（ちょうど米国のポンペオ国务長官がシンガポールでASEANの外相たちに、北朝鮮への制裁強化をアピールした直後のタイミング）。先のメガワティも、このときのプアンも、米国のアジア戦略を配慮する気配を全く見せていない。むしろ、北朝鮮に対して地域で連携して圧力を強めようというアピールがされるごとに、インドネシアは逆の外交を展開。それは何を意味するのか？
- 北朝鮮に対して国連の制裁が2017年に課せられたが、ジョコウィ政権は二国間貿易を発展させようとしてきた。2018年には300万ドル相当の石炭を北朝鮮籍の船がインドネシアに持ち込み、インドネシア政府が一旦は取り押さえたものの、石炭の取引は停止されなかった。また、2020年3月、平壤駐在のインドネシア大使は、Suara Indonesiaという海外にいるインドネシア人向けのラジオで、北朝鮮に対して国際社会は制裁の緩和に向かうべきだとし、二国間の貿易も進めていく準備をしていると説明。国連制裁というハードルがあるが、今こそインドネシア企業が平壤に来て新しい貿易を開拓するときであり、大使館も積極的に商談をバックアップすると訴えた。
- 北朝鮮にはインドネシアの食品や洗剤などが輸入。市民に人気。大使館でも2019年からインドネシア製品のギャラリーを館内に設置し、積極的なプロモーションを開始。



- 大使は、現在の両国間の貿易は直接的な貿易ではなく第3国で第3者経由に限定されているが、今後の積極的なビジネス交流を訴える。インドネシア商業省によると、2019年に北朝鮮への製品輸出は大きく伸びている（額でいえば、2019年に300万ドル強で、国連制裁が効いた2018年の93万ドルと比べれば約3倍の伸び）。2015年には260万ドルほどであり、その規模より上回っている。北朝鮮からの輸入は2016年の550万ドルから2018年には33000ドルに落ち、2019年はちょっと上がって20万ドルに留まっている。北朝鮮からの輸入は鉱物、化学製品、フィラメント電球、半導体などが主。
- ウィドド政権の任期中に、メガワティは父親のレガシーである北朝鮮との関係を、彼女の手で一步前進させたいと考えている。大使も、その要求を理解しており、新しいインドネシアと北朝鮮の関係のシンボルにある契機を探している。その関連で、現在インドネシア大使館が模索しているプロジェクトの一つが北朝鮮「地ビール」の大同江ビールを輸入して、オセアニア地域の販売ハブになるというビジョン。
- またスカルノ時代に「金日成花」が両国のシンボルとなったように、朝鮮虎とオラウータンの交換も盛ん。トラとサルとで新時代の友好シンボルにするというアイディア？
- 敵対や孤立といった外交は眼中にない。それが「アイシャ事件」でも露呈。この事件は、2017年にマレーシアでの金正男暗殺工作で、インドネシア人女性のアイシャが、テレビの「どっきり企画」を手伝うという嘘で騙されて暗殺に加担した事件。もう一人の加担者に仕立てられたベトナム人女性のほうは、ベトナム政府が自国民を巻き添えにした北朝鮮に対して強く抗議。だがインドネシア政府はずっと静観し、北朝鮮に公にクレームすることはなかった。このベトナムとの正反対の態度は、いかにジャカルタが平壤との関係に気を使っているかがわかる。



おわりに～ミドルパワー外交の模索

- なぜインドネシアは、このような北朝鮮外交を展開？
 - 一般的な説明されるような歴史的な関係や個人の思い入れ？
- 今や「ミドルパワー」となったインドネシアの国家としての自信が反映。国連の制裁が続き、対北朝鮮外交が世界的に冷え込む中、インドネシアは逆に外交関係の強化を展開できることを示す
- 大国間の綱引きのなかで埋没してしまう他のASEAN諸国と違って、地域の中力国としての存在をアピールするナショナリズムが働いている。
- とくに現在、米中対立で東南アジアが超大国の草刈場になっている地政学的な現実を考えると、「独自路線を取れる」という戦略アイデンティティは、ミドルパワーを自負し始めたインドネシアのナショナリズムを満たすもの。インドネシアの北朝鮮外交は、そういう現代的なナショナリズムが多分に反映されている。

